

マーシャル経済学の形成*

——とくにマーシャル文書との関連で——

西岡 幹雄

I はじめに

マーシャルにとって、経済学は決して当初から取り組もうとした学問ではなかった。彼が経済学を1871-2年頃以降、本格的に専攻するに至ったのは、むしろそれ以前の数学、分子物理学、そして道徳科学について、知的変遷を重ねた結果であった(Marshall 1925, pp. 418-9; Whitaker 1975, p. 8)。

したがって、マーシャルの経済学の形成を考えるうえで、彼が以前に研究していた科学分野、とくに経済学を選択するにあたって二者択一の対象となった心理学の意義は、きわめて重要であろう。

本稿では、ケンブリッジ大学所蔵のマーシャル文書(とりわけ心理学関係文書)を検討することによって、マーシャルが経済学者になるまでのプロセス、およびヴィクトリア朝後期における経済学と心理学(およびそれに至るまでの道徳科学)との関連を、浮き彫りにしたい¹⁾。

II 精神上の危機と心理学の研究

1. 「自意識」の道徳哲学—「節儉律」と「フェリエの命題」

ケンブリッジでフェローの地位を得たマーシャルは、最初、数学の応用学であった分子物理学(今日の量子物理学)に関心を寄せていた(Marshall 1925, p. 5; Whitaker 1975, p. 6)。しかし彼は、研究を進めるにつれて、それが神を「引退した技術者」と必然的に位置づけてしまうことになりはしないか、と深刻に懸念しはじめた。とりわけ、H. L. マンセルの形而上学

をめぐる「グロート・クラブ」内での議論の応酬は、人間の責務が神の啓示を受け入れるだけであるという福音主義を、幼少時から無条件に認めてきたマーシャルにとって、衝撃的な事柄であった²⁾。

むしろ、彼の分子物理学の師、ジョージ・ストークスのように、福音主義と物理学とを両立させた研究者がいなかったわけではない(Butler 1992, p. 285; Wilson 1984)。だが、マーシャルが両分野に誠実であればあるほど、その根源を取り扱っている道徳科学、とくにマンセルのいう自意識こそ人間心理の本質であるという主張に、彼は惹かれていった。

当時の道徳科学の特徴は、外界と人間の認識作用との関係を心理学的に理解しようとしていた点にある。そうした道徳科学の思潮を背景にして書かれたマーシャルの最初の論稿が、自意識という心理機能に着目した「節儉律」(Marshall 1867a)であり、ついでそれを意識状態から考察したのが「フェリエの命題」(1867b)であった³⁾。

「節儉律」では、人間心理を「本源的で普遍的な現象」という客観的事実から区別し、これを自意識として捉え、(個物に先じて)普遍を考える論者にとっての主観的な原則であるとした。これは、マーシャルの「不可知論者」としての側面を示すとともに、現在と過去の意識内容の往還による心理学的な類推方法によって、心理的世界と物理的世界のどちらもが、人間の精神現象にとって固有な学問領域であることを意味していた。それが、宗教・信仰に代表される不可視の問題と社会科学の問題とを、同じ人間のなかで等しく宗教と経済の問題として両立でき

るとする『経済学原理』の姿勢(1890, Bk. 1 ch. 1 § 1)を支えていたことは明らかである。

そのようなマーシャルの研究態度は、「フェリエの命題」では、人間が動物から区別される根拠を、機械要因としての「外在的兆候」と、自意識要因としての「内在的兆候」との結合に求めることにもなる。マーシャルにとって、人間が物理学的な機械要因からのみ構成されるというバインらの連合主義の立場だけでは、人間の精神メカニズムをすべて物理学ないし生理神経学に解消してしまうことになり、他方、意識という内在的世界のみに固執すれば、精神現象をどのように客観的に分析するかについての限界を露呈することになるからである(Marshall 1867b, ff. 1-3, 7-8; Raffaelli 1994, pp. 104, 106)。

「フェリエの命題」は、観察されにくい人間の自我の状況を、観察されやすい状況に復元して、これらに社会的評価を与える「人間の心の作用と発展の契機」の析出に向かっていた(Marshall 1867b, ff. 11-4; Raffaelli 1994, pp. 107-8)。このことはまた、マーシャルが道徳科学の形而上学的ないし哲学的側面から脱し、人間自身の能力・活動とその精神機構との連関を積極的に究明しようという段階になったことを表すであろう。

2. 心理学研究と「機械論」の性格

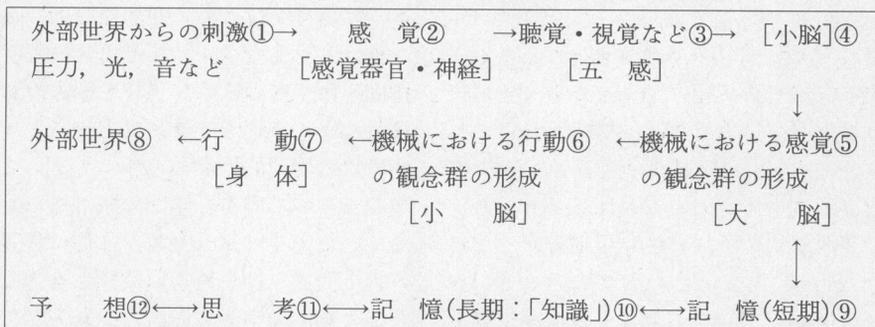
マーシャルの追想によれば、心理学は、「人間性とその可能性について、建設的かつ前進的な研究を十分見込めるように思われました。私にはそれが自分の欲求にもっともよく合致するだ

ろうと考えたのです」(Whitaker 1975, p. 6)。それは、「もっとも進歩的であり、人間の才能のより高度で、より速やかな発達の可能性に対する魅惑的な研究」(Marshall 1925, p. 10)であり、彼にとって「人生を心理学に委ねるか、経済学に委ねるか」(*op. cit.*, pp. 418-419)の選択肢になった分野であった。したがって経済学へのマーシャルの道程を考えるうえで、その最終段階である心理学論文「機械論」(1868a)⁴⁾を考究することは、これまでたどれなかったマーシャル研究の隘路を打ち破る一助となりうるものであろう。

「機械論」は、人間の心(その実体である脳)・身を機械になぞらえることから始まる。機械は、まず外部世界からの刺激(圧力、光、音、印象および動機)の静態的動態的な変化を受容する感覚過程の器官(第1図の①→②③の作用)としての役割をはたし、感覚によって導かれた内的変化(「感覚の観念」)、および行動を生みだすもともなった内的変化(「行動の観念」)を喚起する。マーシャルは、人間精神が、感覚→感覚の観念群⑤→行動の観念群⑥→行動⑦という連続的な循環経路をたどって形成される人間の観念と活動のパターンであるとしたのである(Marshall 1868a, ff. 1-2; Raffaelli 1994, p. 116)。

この循環が繰り返されると、感覚的経験の累積であり、外界の複雑な状況に対応していく脳の学習機能である記憶⑨が生みだされる。それが時間または場所の接近によって、あるいは事物の相異の比較によってえられた学習成果(「観念の連合」)を、機械内部に保持・固定・再現するのである。このような情報が脳の処理を経て、

第1図 「機械論」における心理過程と生理過程との対応と循環関係⁵⁾



反応・行動のパターンを繰り返すと、当初は短期的な記憶にすぎなかったものが、そこに情報を長期的かつ計画的に統御する機能としての記憶が形成される(第1図⑩:これを「知識」と呼ぶ)。そしてこれらの蓄積によって、系列的な学習および高度な概念の集合にもとづいた思考体系⑪が、永続性をもつ(*ibid.*)。

さて脳内部の観念は、それぞれ一個の「車輪(wheel)」として表わされ、その大きさも数も無限にあると想定されている。この車輪は単独で作用するのではなく、その他の車輪とベルト(band)で繋がりをもとうとする。そのため一つの車輪が回れば、かならず他方の車輪が回ることになり、それが度重なれば、両車輪の結合によって発生した電磁力によって、機械には予想機能⑫が備わる。このような感覚・観念・行動の循環構造の変化の多様性が認識される(第1図の⑪と⑫との相互作用)にしたがって、新たな行動の変化を念頭に置いた「予想は、当初、偶然によるにしても、あるいは外的手段によるにしても、新たな行動を生み出す」源泉となり、次の段階では所与の感覚・行動パターンに影響を及ぼすのである(Marshall 1868a, ff. 3-6; Raffaelli 1994, pp. 117-8)。

観念・予想の生成と外部環境の変化との関連は、「他の事情にして同じならば」という一定の状態がもし変化すれば、どのような新たな予想と行動が組成されるのかという心理経路(*op. cit.*, f. 8)への言及だけにとどまらず、それは彼の経済学の方法の出発点である静学的方法(「仮定的変化の研究」ときわめて類似している⁵⁾。そして最終的に「機械の仕組」とは、状況の変化のなかで生じた偶発的な観念と行動から、より高次の機械の決定段階である広範な熟慮と意志を含んだ感覚・行動形態に定着するに至るまでの、人間の心的模索の構図でもあった(Marshall 1868a, ff. 6-13; Raffaelli 1994, pp. 117-20)。

こうした人間の観念と行動のメカニズムは、実際には感覚と脳組織の機能によってバック・アップされている。大脳は感覚の観念群と対応(第1図⑤)し、身体とは直接接しないのに対

して、小脳は大脳だけでなく身体とも密接な関係をもちながら、行動の観念群に即応している(⑥)。外界の情報はさまざまな感覚器官や神経系統(聴覚や視覚)(②③)を通じて、小脳(④)→大脳に伝達され、そこで感覚の観念群に応じた相関的な行動の観念群⑥が生みだされ、最後に身体の行動⑦が発現されるという循環になる(Marshall 1868a, ff. 10-1; Raffaelli 1994, pp. 120-1)。

生理組織によって支えられた「自然の法則」(心理過程)は、究極的には外部環境に影響を与え、その外部環境が次のステップでは心理過程および生理過程に大きな作用をもたらすであろう(ff. 12-13; p. 121)。マーシャルにとって、このような心理学は、1860年代に至るまでの連合主義思想や脳神経研究の発展をふまえて、人間の精神作用を扱う道徳科学と、脳・身体を通じて人間の実体的働きを扱う生理学(人間能力の科学)とが、かくも重なり合う可能性をもった研究だったのである⁷⁾。

III 「機械論」から経済学へ

1. 「機械論」における人間像の限界と時間作用

「機械論」の大きな特徴は、こうした人間・動物・機械から発せられる情報や兆候を孤立的に研究するのではなく、むしろそこから「機械現象を精神現象に変換できる」一般的な原理を見だし、これを基礎にした知識社会の可能性を探究することにあった。マーシャルが、人間の知的行動を代行してくれる機械、具体的には人工言語・代数・図形などの識別処理機能による学習・情報処理システムを自動的に行なえる猿や機械について多くの紙数を割いたこと⁸⁾は、このことを示唆するであろう。つまり彼は、人間が外部環境に対して自動調節的に作動を繰り返しながら、適確な推理と意志決定(情報処理過程)を遂行できる「人間の特性(character)」の最適組織構造を考察していたのである(「機械論」におけるオートマトン・システムに対する関心)。

こうした人間—機械システムの緊密化という

マーシャルの問題意識に影響力をもったのは、バベッジの「自動プレイヤー」(いわゆるコンピュータ機能)のビジョンを通じての「人間の作業科学」思想、すなわち最適動作と最適時間の徹底的追求と、その標準化が行なわれれば工場の労使は最大利益を享受できるという視点である(Babbage 1832, p. 250)。そしてバベッジの提案した自動機械の如く、人間も自律化ができれば、観念の迅速な結合によって時間の無駄が省かれ、一瞬のうちに所与の目的を遂行できるであろう(Marshall 1868a, ff. 18-38; Raffaelli 1994, pp. 122-8)。

しかし問題は、現実の人間が可塑的・即時的に情報や環境の変化に応じて、知識を生産・蓄積し、そしてこれをフィードバックさせ、人間の意志と行動にとってもっとも正常な行動とみなせるところまで収束させるには、マーシャル自身が認めているように、相当な学習時間を要する。ただし、バベッジの考え方では、科学的な人間-機械システムにそった人間の活動の組織化は可能であり、若干の時間を要しても、より効率的な人間と機械との最適な均衡を容易に生み出すことができる。

しかしながら、マーシャルの「機械論」の方は、記憶と知識に関する記述に見られるように、人間の意識過程と意志決定に働きかける時間の長さによって、おそらくその合理的行動は限定されるであろうし、またその時間の長短は人間の内面で性格の差異を生むほど不確実な作用を及ぼすであろう。第一、人間の最適な活動を約束するのは、まさにその能力が十分発揮できるだけの状況がその個人だけでなく、彼が属する家族や仕事の仲間・地域・社会のなかで、整っているかどうかであり、もし外部環境が人間の成長の潜在性を発掘できないほど劣悪なものであれば、人間の心理的・生理的・物理的特性を統合できるエルゴノミックス的なシステムの構想などは、むしろ非現実的である。

こうした人間-機械システムによる「機械の仕組」の累積から、人間の知的・精神的改善とその潜在能力の開発まで視野に収めようと、思索を深めれば深めるほど、マーシャル自身、「機

械論」の内容ですべてが究明できる自信はもてなかったのではなからうか。人間の性格とその成長の可能性などの問題は、人間が属している心理的・生物的環境のみならず、その基礎である物的基盤、あるいはその上部に築かれる社会的・歴史的・文化的環境との相互関係をも考慮に入れるべきであろう⁹⁾。もしマーシャルが、人間活動と物質的社会的環境とのオープンな連関を積極的に取り上げなければ、「機械論」以降、探究しようとした現実の世界での人間の能力の発掘の可能性やその創造的行動システムの成長経路を、跡づけていくことは困難になるであろう¹⁰⁾。マーシャルの人間科学の研究は、心理学的テーマだけではすでに限界に突き当たったというべきであろう。

2. 初期経済学の特徴と人的投資

1870年代初頭にはマーシャルは心理学者でも哲学者でもなく、すでに経済学者になっていた。周知のように、経済学者となったマーシャルは、経済学以外の科学について叙述することはなかった。しかし、はたして彼の経済学は、それまでの彼の心理学研究とはまったく無縁なものだったのであろうか。

環境に対して、「自律的人間(autonomic mankind)」とその基底にある心理的・生理的作用に主な関心を寄せていたマーシャルは、ケンブリッジで教鞭をとってすでに数年を経て、身体への厳しい使役が貧血や自己の改善もまならない事態を生みだしている人間(とくに労働者)と外部環境(経済状態)との関係に注がれるようになっていた。

1873年のマーシャルの「経済学講義」(以下では、「講義」と略称)は、そうした彼の意識と、なぜ彼が経済学者を目指すようになったのかの一端を鮮明にできるように思われる¹¹⁾。

「講義」によれば、人間を支える外部環境が物質的に豊かな生産力を背景にした産業社会として現われたにもかかわらず、その環境に対応する人間という主体の方は、過重労働、道徳的退廃と知的水準の停滞、さらにはその家族(とりわけ子供たち)の物的状態だけでなく、むしろ

彼らの知的・精神的・教育的状態を犠牲にしているというのである(Marshall 1873a, b, 第2講)。

「講義」の主軸は、国民の富の増大が労働の能率の高低に左右され、その高低は教育の質とそれを支える物質・家族・社会の環境とに依存するという事にある。もし人々が資本を物質・商品だけでなく、これを生みだす人間の知的資質の開発を目指す「人的資本(Personal Capital)」に投資し、その事前・事後の活動が十分な効力の発揮を保障するために労働時間を削減すれば、健全な身体と教育資本の蓄積の相互関係をバックにして、高能率労働による労働者とその家族の知的・物的改善を通じて高賃金経済による加速的で累積的な社会の発展は実現されるであろう(1873b, ff. 20-4)。つまり、人的投資が社会発展と労働者の生活様式の改善を結びつける永続的基礎であり、それと労働環境の改良との連関から生まれた高賃金経済の定着は、国際競争のなかでイギリス国内産業の生産力を衰退させることなく、むしろ高度で豊かな社会と文化が具現できるというのである(1873c, pp. 111-112)。

そこで問題となるのは、まず労働者たちにとって人的資本形成のための必要な時間とそれが効果を現わすまでの時間の長さ、次に人的投資を決断する人間心理のあり方であろう。

時間分析は、「価値論草稿」(1871)のなかでは、供給調整の異なった度合を現わすメルクマールとして利用されていた。具体的には、人間が市場情報を識別できる時間がきわめて限られている状況では、価格設定は、固定的に在庫から規定されてしまう(クラスA)。これに対して、市場参加者がこの状況を若干なりとも掌握するだけの情報と経験の時間レンジを得れば、価格の決定は将来の販売のための留保需要を考慮した分析に移行する(クラスB)。さらに時間が経過して、生産量の増加の意志決定を行なう段階(クラスC)から、競争を阻んでいた摩擦や習慣、その生産での技量をもつ人々の配置、機械などの一切の「生産形態」も変化したうえで長期的な均衡に至る(クラスD)(1871, pp. 134-140)。

むしろ後年の『経済学原理』からみれば、これらの決定は、固定的生産要素の完全なフロー化を基準にしたものではない。しかし初期価値論モデルが、かつての心理過程とその行動の研究のなかで中心的役割をはたしてきた時間要素を、現実の市場(外部世界)と、そこからえられる人々の知識と情報の試行錯誤のフィードバック(競争)とを通じて、再編成しようとした点は、『経済学原理』と共通するものがある。また一時的均衡から長期的均衡までの構図は、(スミスらの価値論の枠組からの影響が当然あるにしても)マーシャル固有の理由として、現実の人間が認知できる時間の長短によって実際起こしうる自己実現のための選択もごく限られており、その結果も最適行動から判断すれば限定された合理性に帰着することを、経済学の面から明らかにしたといえる。

しかしマーシャルにとっては、長期の価格分析でさえ限られた市場環境と人間の関係でしかなかった。というのは、「ジュヴォンズ氏の『経済学の理論』」評(1872)において、彼は市場に作用する時間の推移に応じて価値と分配の均衡の内実も変化することを論じたあと、これに連続して今度はどのようにして労働の供給が長期的に調整されていくのかに関して、熟練のための人的投資(次代への訓練教育投資を含めて)の効果にもとづく、いわば超長期の問題に経済学の最終的な解答をおいていたからである。

連続的時間のもとでの人的投資とその結果としての人間成長の構想とのドッキングは、人間の意識行動の変化からいえば、教育を受けた労働によってこれまで悪循環を起こしていた労苦による生理過程を追放し、自らの仕事の自己管理による監督労働の不要化・不正職務の防止・知的多彩さと柔軟さ・異質な世界や階層の情報知識の摂取と自己能力への統合、事業運営における迅速さ・信頼性・進取の気性を生みだして、高い生産性の実現とこれまでにない高収入を約束するものであり、同時にその効力は一国の経済競争力を強化させ、生産物とサービスの価格も以前よりも低めることができるのである(Marshall 1873b, ff. 34-6)。

こうした物的・精神的前進と経済発展との連関こそが、イギリス社会において教養と洗練された精神をもつ「自立的な人々(independent people)」（心理学的に言えば、自由意志と能力を備えた人々）を広範に根付かせるものであり、その基軸として人的投資における累積増加が「新社会の進歩」の基調をなすものであると強調したのである（これを彼は「紳士への道」と呼ぶ）(Marshall 1873a, b, 第2・第3講)。この「自尊心を備えた自立的な人間」というテーマは、保護主義に関する純粋経済理論として彼が書こうと決意したはずの『外国貿易の理論』草稿においてですら、「産業および社会進歩との関係」でなおも大きなスペースを要したのである(Marshall 1877, Bk. 1, Chs. 4-5)。

それではマーシャルが想定する人的投資の内容はどのようなものであり、またこれがどんな主体によってなされるのであろうか。

マーシャルのいう人間の養成は、ベッカーらの「人的資本」のような企業内部で通用する特化的教育や企業内訓練投資ではなく、世代間を通じた社会の多岐にわたる広い洞察力と全般的行動にわたる「教養教育」(一般的教育)への投資にかかわっていた。したがって、経営者は、このような投資にはインセンティブをもちえないから、投資主体は経営組織外部の両親か、第三者組織である国家でしかない。そのなかで国家の方は、「講義概要」によれば、「一国の費用で国民に教育を(高等教育を含めて)受けさせることの有利さはあるが、国家があまりに教育に介入することは、奴隷への投資の場合と同様、子供を道徳教育のない知識教育に限ってしまう恐れがある」として、家庭主導の教育投資と比べて補完的な役割に限定した¹²⁾。つまり、自由な個人としての人格形成と家族による教育負担との不可分性は、人的投資の効果を確実にするための母親(婦人)の役割への言及ともあいまって、人間の創造的な活動が正常に動きだすに至るまでの知徳身の育成の組織基盤(それはこれまでの心理学の研究では所与にされていたが)にとっても不可欠なものであった(1873a, ff. 21-3)。

3. 経済組織と自立的人間の経済学

以上のように、家族が非予知的な変化に即応した能力と性格を自発的に開発する人間志向的(person oriented)組織だとすれば、一方、経済組織は外部の市場環境に対して参加メンバーの協働メリットを追求するための実際生活のフォーマルな主体であった。

「講義」によれば、経済組織による個人の経済的利益と幸福の追求は望ましいが、自己の利益ばかり追求しては経済組織が成り立たない。しかし自己の個人的意志を無視すれば、モラルは低下し、労働の生産性は下がり、収益は減少し、組織は危機に瀕する。そうなれば組織が人間の豊かな生活という国民経済の究極的目的に貢献できないと論じられている(Marshall 1873b, 第4・第5講義)。すなわち、「理想的に完全な社会組織という遠い目標」は、人間にとって創造的な活動のためのライフスタイルの具現と、それに応じるだけの組織の最適な収益の実現との均衡なのである。

そこでマーシャルは、具体的に「経済組織の機構」として、主に労働組合と協同組合を検討している。イギリスのこれまでの「大規模製造業体制」への変貌と、それにとまなう生活水準の向上は、人々の仕事への価値観や新たな組織のあり方に対する考え方に大きな変化をもたらした。それは上記の2つの組織が、中世の自由都市やクラフト・ギルドから脱皮したことによって象徴されている(1873b, ff. 39-40)。そのなかで、まず労働組合は、組合員の「政治的な教育組織」としては期待できるが、自己の狭い利害の観点からのストライキや打ち壊し・強固な仲間意識などの「悪弊」も併存しており、彼らの生活意識の向上と生産性の上昇、およびその結果の所得増大のための組織としては不十分である(1873a, f. 35; 1873b, ff. 43-9)¹³⁾。また協同組合は、労働組合に比べてはるかに「経営管理能力」と「公平さと自立の精神」を労働者に授けることができるが、現実の自由競争のなかで発明と創造能力・迅速な意志決定・マーケティング・形式的な所得均分主義の制約・消費者ニーズの把握・効率・資本力とその調達の点で、

「理想的な経済組織」としては再検討をしなければならない余地を残していた(1873b, ff. 47, 49-51; 西岡 1992, 66-9 ページ)。この「講義」では、ミルの「アソシエーション」論(『原理』第4編第7章)を念頭において、労働者の共同組織(Association)がどれだけ自らの厚生を高められるのかという観点から究明されていたため、「雇用者と労働者の双方において生産者としての利益」をめざす企業組織(Business Organization)については表立って言及されていない。しかしながら、人間の「旺盛な企業心と強力な個性維持のための」経済組織の探究こそ、マーシャルにとって終生の主題だったといわれてよい(1920, p. viii, 第1巻, 8-9 ページ)。

『経済学原理』では、人的投資による能力啓発に裏付けられた「欲望を考慮に入れたところの活動の基準」としての労働者の「生活基準」と、(金銭的成功や豪華な誇示に満ちた消費生活のための利潤追求ではなく)創造的事業態度そのものに意義を見いだす企業者の「経済騎士道」とが、ライフスタイルとして結合した企業組織は、その組織の質のおよび効率的向上を通じて、勤労者の所得の増加から国民所得増大を累積的に促進し、さらにそれが国民経済の活性化作用によって組織の活気を促すのである(Marshall 1890, Bk. 6 chs. 2, 13)。

マーシャル経済学は、このような人間の自己発展と、組織および経済の成長との相互増進過程を対象にした富と人間の研究として展開されていく¹⁴⁾が、同時にその思考プロセスの根底には、人間のモラルとしての労働意欲をモチベーションの関係として説いた今日の産業心理学的な(たとえばマズローの「自我の欲求」や「自己実現の欲求」、あるいはマクレガーの「Y理論」のような)認識ときわめて共通した色調を帯びることになった。

こうした心理学的諸要素がマーシャル経済学の形成過程において貫流しているとすれば、彼にとってジェヴォンズによる「新しい経済学」は、快苦の極値から物質的報酬と苦痛だけの労働を機械的に算出した人間行動の極端な仮説であった。たとえそれが部分的に当てはまるにし

ても、人間生活の基礎にある組織の構造やそこからの価値観を見いださない、賃金の高さと安易な消費生活の享受の関数として特徴づけられる、向上性の低い「安楽基準」の世界である¹⁵⁾。換言すれば、それは、外部環境の刺激によって人間が機械的な極限に反応するだけで資質発展のない静態的人間観であるともいえる。

このことはまた同時に、心理学研究の段階でマーシャルが大きな関心をもっていたバベッジのビジョンに対しても、それが分業や機械の価値を前進させる一つの手段以上の意義をもはや認めなかったし(Marshall 1881, p. 50, 63 ページ)。「バベッジによってかなりの程度まで考えだされた構想」からでてきたテラーらの「科学的管理法」に関しても、マーシャルは、それが労働者の知的教育による知性の増進に懐疑的な「幾分偏向に陥った」考えであり、「経験の十分な実態を把握していない」と批判するのである(1920, chs. 11-12)。

このようにマーシャル経済学そのものを突き詰めていけば、実は、それが1867年以来の彼の心理研究テーマとの重なり合いに起因していることは、自ずと理解できようし、マーシャルが熱弁を奮う「人間性の完成の可能性」と「潜在的な未開発のままに浪費されてきた能力」を自立的に発揮させる組織、そして経済発展という三位一体的な問題意識も、こうした脈絡にたってはじめて了解できるであろう(Marshall 1873b, 第4・第5講; 1885; 1890, Bk. 3 ch. 9)。

むすび

マンセルらによって引き起こされた「知的衝撃」によって、自ら頼みとした神学的知的基盤が脆くも崩れてゆくとき、これらの「哲学的基礎」を再検討することから学究生活が始まったのだというマーシャルの晩年の回顧(Marshall 1925, p. 6)は、「節儉律」以降の論稿のなかから、十分うかがい知ることができた。

マーシャルが最終的に選択した経済学は、心理学における無限定な機械モデルの人間観¹⁶⁾では得られなかった社会環境と人間の具体的な結

びつきを考察する「人間の心の成長」を促す科学であった。彼は、人間の潜在能力の無限性を信じ、その能力を経済組織内外や広く社会文化において十分に行使できる研究テーマに到達したのである。同時にそれは、マーシャル以後の経済学がブラックボックスとしてあえて取り扱わなかったサイコロジカルな問題を、マーシャル経済学に内在させる結果になったともいえる¹⁷⁾。

本稿では、1867年から1873年ぐらいまでの、主にマーシャル文書に依拠しながら、彼が経済学を「生涯の天職」として定めるまでの経緯について考えてきた。これまでの検討の結論からいえば、かつてヴァイナーが言ったような、マーシャルの経済学の出発点において道徳哲学や心理学が果たした役割を、たんなる彼の「倫理感」から出ただけであるという言及には躊躇を覚えざるをえないし(Viner 1941, p. 227), ホイテカーのように、「当初の彼の心理学研究は、貴重な時間の浪費の所産にすぎなかった」(Whitaker 1975, p. 7)と切り捨てるのは、マーシャルの重大な真意を無視するものであろう。

(論文受付日 1994年11月4日・採用決定日
1995年7月4日、同志社大学経済学部)

注

* 本稿を書くにあたっては、ケンブリッジ大学マーシャル図書館と同館主任司書 Donald Ross 氏(1990年当時)のご好意を得た。

1) 本稿は、基本的に筆者の草稿判読によったが、つい最近、Raffaelli(1994)として復刻されたので、このページ数も付した(なお、これにはマーシャル文書のページが付いていないため、本稿ではあえて f. とし付けていた)。

2) マンセルをめぐる論争に関しては、次のような文献を参照されたい。早坂 1971, 146-9 ページ; Marshall 1925; Schneewind 1977, pp. 98-9, 181.

3) これらの成立年月については、cf. Sidgwick 1867; Whitaker 1975, p. 8; Raffaelli 1994, p. 62.

4) 「機械論」は 1868 年頃のグロート・クラブにおける報告原稿である可能性が高い(Whitaker 1975, p. 8; Raffaelli 1991, pp. 5-6).

5) 経済学の分野でこの方法が採られるのは、1872-3 年にかけてのことである(早坂 1971, 120 ページ; Marshall 1872; 1873b, f. 5; 西岡 1992, 46-8 ページ参照)。

6) [] の部分は生理過程にかかわる箇所。

7) マーシャルの考え方には、人間の精神を観念の連合とみなす理解や、これに多大な影響を与えた脳神経研究(ハートレイによる観念は脳神経の微振動であるという学説、ヤングからヘルツホルムまでの視覚・聴覚と感覚・観念との連関の研究、そしてホール、フローレンスやブローカによる大脳・小脳・脳管・神経・身体それぞれの運動に関する所説等。Schultz; 今田, 123-6, 144-151, 189-197 ページ参照)が念頭にあったと考えられる(西岡 1993, 78 ページ参照)。

8) cf. Marshall 1868a, ff. 18-38; 西岡 1993, 79-81 ページ。

9) 「節儉律」でマーシャルは、人間の精神科学にダーウィンの進化論のアナロジーをそのまま採用することが、意識が対象に関してその関心部分だけを優先し、それ以外の部分は排除してしまう危険を指摘していた(1867a, ff. 5-6, 8; Raffaelli 1994, pp. 96, 98-9)。しかし「機械論」の主張をさらに展開させていくと、今度は物的現象の領域である環境と、心理的領域との対応関係、および両者の「結合によるより高次の段階への進歩」を研究する新たな進化論的色彩を帯びた人間社会の科学に推移していく端緒となろう。

10) 「論理学者の責務」(Marshall 1868b)では、非ユークリッド幾何学の発見をめぐる正否の論争を紹介しようとしているが、前の諸論稿と比較して、この分野を継続して前進させるマーシャルの積極的意欲はもはやみられない。

11) 「講義」の全般的な内容については、西岡 1992 を参照。

12) 『産業経済学』『経済学原理』『産業と商業』において労働技能に対する補助金、一般教育に対する政府奨学金の貸与などが奨励されているが、全般的にいて人間の潜在的能力の開発に占める国家の役割は、これら著作でも大きいとはいえず、また経済発展の要素のなかでの「技術教育」「専門教育」(OJT)の軽視は一貫している(西岡 1985, 27-8, 40-1 ページ参照)。

13) 労働組合に関する彼の当初の所説としては、cf., Marshall 1873d; 西岡 1992, 64-6 ページ。

14) マーシャルの最初の著作『産業経済学』において、「人間の無知、偏見、因習などの消極的な抵抗」を究極的に克服して、自由競争という「各人が自分とその家族の物質的利益を増進させよう」とする「積極的の原理の長期的な結果」を通じて、「正常な結果」がもたらされる(Marshall 1881, pp. vi-vii, 2, xiii-xiv, 2 ページ)と指摘したとき、人的投資による「自立的な人間」形成やその育成基盤たる家族と、その外部環境である市場社会とは、競争にともなう時間効果によるフィードバック過程によって、ともに経済的な合理性のもとで重なり合う。そうした正常な結果の生成と増進こそが、富の研究であると同時に「労働者の性格」の形成の研究である、という彼の経済学の主要な骨子であったことは明らかである。

15) 後年の『原理』におけるこれらの議論については、西岡 1985, 45-50 ページ参照。むしろマーシャルの発想の根底には、またヴィクトリア期に特徴的なジェントリー意識や自助の精神が関係していることについては否定するつもりはない。なお『外国貿易の理

論』草稿でも、近年のイギリスの賃金の上昇が教育費や体力増進のためではなく、奢侈財の輸入やアルコール飲料の購入に相当向けられていると、彼は批判している(1877 Pt. 1 Ch. 4 § 8).

16) マールにとって、心理作用を実験室で原理的に確認し、新たな(実験)心理学を、経済学と同様、ケンブリッジでトライボス科目に昇格させようとしたJ. ウォードの運動には、もはや何の興味もなかったであろう。

17) たとえば労働時間・疲労と作業能率、仕事を通じての自己実現の欲求、自尊心と経済的欲求、自己の利益よりも社会的評価を重視する態度、経済組織のなかでの人間知性の発展の過程、作業環境と婦人少年労働の科学的研究の必要性、労働の質の社会的影響、経済組織のなかでの達成目標と生きがい、消費欲求の質的な段階差、販売と購買の経営組織の社会経済に及ぼす作用等々の強調(西岡 1992)は、マールの学説が現在のエルゴノミックスや市場心理学そして経営組織心理学の萌芽をもっていたとみなせるであろう。

参考文献

- Babbage, C.(1832) : *On the Economy of Machinery and Manufactures*, A. M. Kelley (reprint).
- Butler, R. W.(1992) : "The Historical Context of the Early Marshallian Work," *quaderni di storia dell'a economia politica*, nn. 2-3.
- 早坂忠(1971) 「マール経済学形成過程についての若干の覚書」『社会科学紀要』(東京大学)1970・71年号。
- 今田恵(1970) 『心理学史』岩波書店。
- Marshall, Alfred(1867a) : "The Law of Parimony," *The Marshall Papers*, 27th March (Manuscript).
- (1867b) : "Ferrier's Proposition One," *The Marshall Papers* (Manuscript).
- (1868a) : "Ye Machine," *The Marshall Papers* (Manuscript).
- (1868b) : "The Duty of the Logician or System-maker to the Metaphysician and to the Practical Man of Science," *The Marshall Papers* (Manuscript).
- (1872) : "Mr. Jevons' Theory of Political Economy," *The Academy*, Vol. 3 No. 45.
- (1873a) : "Outline of Lectures Course and Notes," *The Marshall Papers* (Manuscript).
- (1873b) : "Political Economy: Lectures to Women," *The Marshall Papers* (Manuscript), April-May.
- (1873c) : "The Future of the Working Classes," 25th November [Marshall(1925)所収].
- (1873d) : "Fragments on Trades Unions," [Whitaker(1975), Vol. 2 所収].
- (1877) : *The Theory of Foreign Trade*, [Whitaker(1975), Vol. 2 所収].
- (1881) : *The Economics of Industry*, Macmillan(2nd ed.) (橋本昭一訳『産業経済学』関西大学出版部).
- (1885) : *The Present Position of Economics*, Macmillan(杉本栄一編訳『マール経済学選集』日本評論社).
- (1890) : *The Principles of Economics*, Macmillan(9th ed.) (馬場啓之助訳『経済学原理』東洋経済新報社・永澤越郎『経済学原理』岩波ブックセンター信山社).
- (1920) : *Industry and Trade*, Macmillan(3rd ed.) (永澤越郎訳『産業と商業』岩波ブックセンター).
- (1925) : *Memorials of Alfred Marshall*, A. M. Kelley (reprint).
- 西岡幹雄(1985) 「マールの人的資本論の展開」『経済学論叢』(同志社大学)第36巻第1号。
- (1992) 「マールの初期経済学講義とその草稿について」『経済学論叢』(同志社大学)第43巻第4号。
- (1993) 「心理学から経済学へ」『経済学論叢』(同志社大学)第44巻第4号。
- Raffaelli, T.(1991) : "Editing Economists' Non-economic Manuscripts: the Case of Marshall," *Symposium: Editing Economists*, Lausanne, Sept.
- (1994) : "The Early Philosophical Writings of Alfred Marshall," *Research in the History of Economic Thought and Methodology*, JAI Press Inc., 1994.
- Schneewind, J. B.(1977) : *Sidgwick's Ethics and Victorian Moral Philosophy*, Clarendon Press.
- Schultz, D.(1981) : *A History of Modern Psychology*, Academic Press.
- Sidgwick, H.(1867) : *Sidgwick Papers* (Add c104: 65), University of Cambridge: Trinity College.
- Viner, J.(1941) : "Marshall's Economics, in Relation to the Man and to His Times," *The American Economic Review*, Vol. 31 No. 2.
- Whitaker, J. K.(1975) : *The Early Economic Writings of Alfred Marshall 1867-1890*, Macmillan, Vol. 1.
- Wilson, D. B.(1984) : "G. G. Stokes," *The Victoria Studies*, Vol. 28 No. 1.